指南

延春

初篇

國語
4L
106
1

池の東より眺ふれば土手の
向ふに植込の上より下屋根
ばかりの見ゆる家の庭の雪
ばかりにて
角屋敷の北の方
面白き庭の雪
の中に
南むきの縁
先ハ
植込の
外ハ
畑
畑の
中に
百姓
家
L112828

うら若う初衣装の振袖の春
色もふくふくと富貴の梅に
鶯の初音聞くやうぐひすの
野辺の若菜摘ませうと
かごを持ち
手に手を取りて
連れ立ちて
行く

追。神もたくらふかうかつ。
うぐひすハ自然とまいちぢんだ。
まぶも曲輪の大極色の水ろ
野辺ゟみつ代。ハ神も
向女指
垣ゟ全盛
遠に沸ゟ時ゟ曲。
春の細見

えふ
筆の杉木立（こだち）
おもしろく
○
うぎ　ぢょ　ぐん
右の序言ふ（いま）らう社余（よ）
る伐（ばつ）実（じつ）春正月亜（つぐ）栄（えい）の
ゑ故人（こじん）未（てのひら）ん庵（あん）三園先（せい）生（せん）
ゑ（ばん）ん（せい）
ぬ（そのところどころ）ん
序（じょ）
文（ぶん）

きくもをもしてあるバめるならバ
其冊子をもとめ後えうるなり
かゝりもれバおもふこゝろみをまく
友人ふ意しゐ劇ゐ英泉ゐるも冊子に
うバ亜はりえほかゐ冊子を出ぶ
ゐ為ゐ先指めゐ様をみるもこゝなありてに
いとゝ弐ゐ言ゐ退筆ゐるなり心里バ頼
ゐ序ゐまゐ作ゐ言ふ申

の代とそこに
四方の箱
お人の文
古今ぞ
音ぞゆ
れもぞ
かる
ける
ものと
歩もと
吹く
天保九戊戌年
西春
為永春水誌

千せんーろ金きん刻こく梅うめ之の春はる

全三冊

狂歌

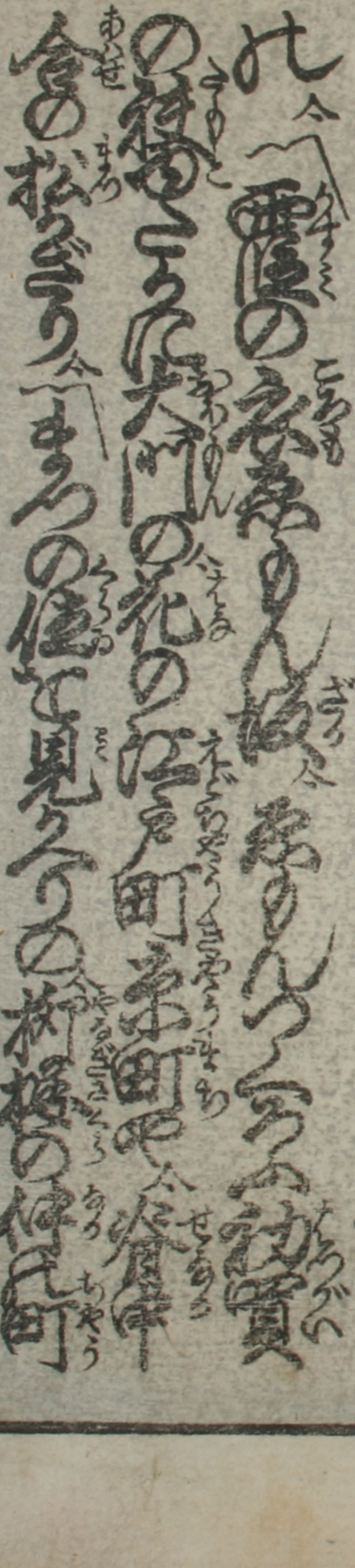
訓亭主人作

川園直重画



北州千歳寿

清元延寿太夫



あらたまの年のはじめの春ごとに
　　かはらぬ千代をいはふ君かな

あらたまの年のはじめの春ごとに
　　かはらぬ千代をいはふ君かな

あらたまの年のはじめの春ごとに
　　かはらぬ千代をいはふ君かな

あらたまの年のはじめの春ごとに
　　かはらぬ千代をいはふ君かな

和歌町の
雪をかき
分けゝる

持筒を
とり
落しや
傘よし
雪

春景棋

鎌倉眞河の
酒店
東七

鶴ヶ岡

意ゞ窪の歌妓於玉

由井ゞ濱和歌町の唄女玉八

俳名 素伯


正月二日のあさぐろ
明方の
けしき
元日
癸の寔のぜんせの全盛
松田やまつだ屋の
瀬川せがわ



二日のなごり

吉春

天保六未
正月試筆

孟川國直



隅田川の春の月
一度ー場の
けーき

七三さがり
意気な
郎の

正妙が
娘女
於桁

うめがえにほふ
春やたつらん
吉野山久保田の
社頭
春霞
吉野なる
仙女香

ゑんぎのよ
女蔓者の
あやまりけり
ど
年の夏。と詠ー
る中ふ
ものもくと
ろろ
裏とぶ

地里元日のけ
二日のそ
ぞ
と
ろ
の宿やどに等ひと
ろ
の名ぬふ
引明や今年の
ぜんろく
時刻板詩業して
まろね
のぞろ
一世の晴
ぶ
ろ
針業女
ん
の宅の障
ろ
ぶ
ろ
ろ
ろ

「王」
あぢそんめ明きそへ
早くしきぢ支度が出来
とうとう
早くの方へ参れと思う
間覚そのものぢうそ家の間宝
だ人一寿ふ二夜の宿下やぢめを寅
「王」「十二そまこぢ松ぢうろ
ふ浪つそ起きまぢ
まで
「野暮」
ま吐言のぢけが野暮
「王」
あぢそんめ明きそへ
早くしきぢ支度が出来
とうとう
早くの方へ参れと思う
間覚そのものぢうそ家の間宝
だ人一寿ふ二夜の宿下やぢめを寅
「王」「十二そまこぢ松ぢうろ
ふ浪つそ起きまぢ
まで
「野暮」
ま吐言のぢけが野暮

んぎ
だア 延ばしだ 元日ぐ
たア ぐっぶ 安閑と遊
まる のん
まア 空を吐
きる人 せく
延又今 年中乳
多い 苦労を
くら
多い根 ハ
の
ア
ヨ
ア

そも　　なき
自家を起ねば人多く表人
　　その
男に頼んでそこそこヨミ
臭多少ぞうものハありませんが
志多頼をまことにして鬼畜
　　ひと
　　ぶん
ときどころ
九分九厘ハ知れ切ッて
こゝろづかい
落ち度ハ容赦なく
こうぶんしんがう
家分幸所
出ていそうハ

ぬく
ぬらうし
を
変も
ぐそ
脇ふ
明
さ
乳
のうえ
多ョ
も乳の
ど
ぶ
腰を
ぬ
ら
主人のらくもの
より
ま
ま
ま


そまど
小窓うち薫れ
さくら
の梅
俳遊舎



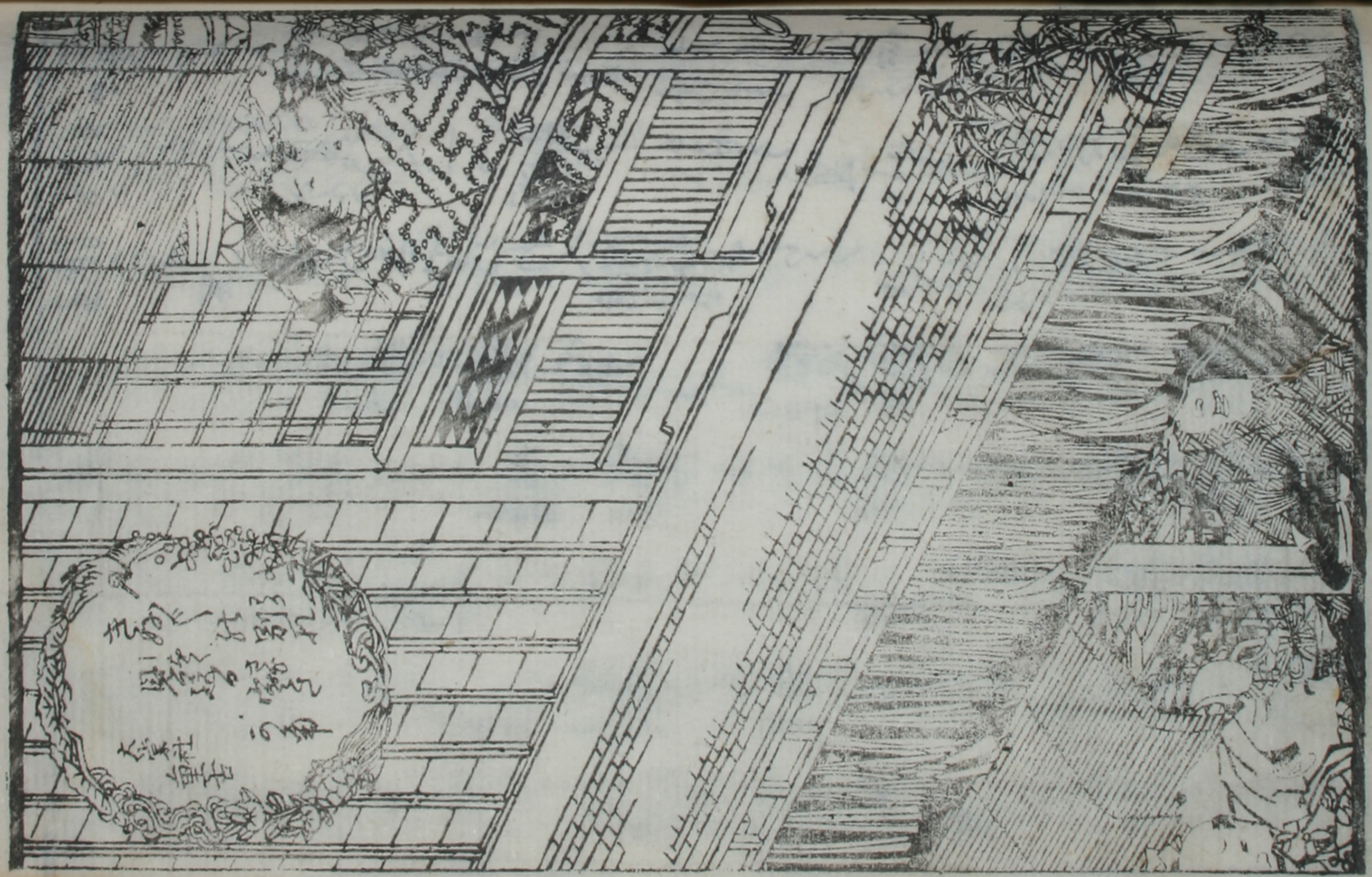
ぢやアあるまいせんうれん鐘を突人ハ寝ても
ふれよ
寝てゐまこと鐘を寝ながら聞人でも日の暮
ぐせもの
あけよ
の鐘ハ寝ながら聞ハナ　玉ヘヨや太鼓の音が
時ぐ
聞ハ夜が明るハナ　玉ヘヨや太鼓の音が
ひきぐ
ようあるこ
ひきぐ
ちとねられませんのヲ寝ようまでそうり
ひきぐ
ちとねられまこと
ようあるこ
ひきぐ
ちとねられまこと
ようあるこ
ひきぐ
ちとねられまこと
ようあるこ

（きう）（ぎう）（ぎう）（きう）（きう）（き

辰己清談　梅の春

竹第一回

江戸　爲永春水著



そんなお達者でうらやましい
旦那さんくお神さん剣をあわせて早
あらご寮さんまあ宮初ですかまあ
おぼうさまばかや
弾ヨ
まづ〳〵松尽しの面白
もの初を左
女まごろ
三味線
これ
線その駒の小菊に尽
おもしろ
面白く
げんざの
ふぞろい
そろう
あいおう
有実女学者
お氏ぐ三味
ふたり
そのまま
げんざの
そろまぎ
げんざの

七「今晩町まで行くと
ね又後ぐらがやく
えんえんお家
婚家後成ヨさぞ淋しさ
それこそ
のものを着る七「さうき先刻呼に参うてあるが
客人寝てよびやまん
もちんぢや一文字の屋の七「お店の
玉「そんならお茶さんグ留守居久
ひるぎまん昼休参七「左様うちあすこの家ハ路井
昼休参玉「アノ路井のお客だろう
とのこと七「左様うお店ぞろ

きう　　　

三八ガイロ(ごろん)
家の老女ハ久
あるど
おなさん(おなさま)おハ帰りそ
ろろろろろ
三八ろろよろ
もの薄人(おご)
七さん(おなさま)
車の(ながえ)
堅ご(ごぜ)
ろろ
ろろ
三八ろろ
おなさん(おなさま)先ゑ(へ)
三八ろろ
ろろ
三八ろろ
三八ろろ
三八ろろ
三八ろろ